

会 議 録

会議の名称及び会議の回	飯田市中学生期の文化芸術・スポーツ活動連携協議会 本部会
開催日時	令和5年11月16日(木) 午後7時00分～9時00分
開催場所	飯田市役所3階 C311-313会議室
出席委員氏名	江取委員、大澤忠史委員、牧原委員、三石委員、吉澤委員、大澤幸弘委員、塩澤委員、手塚委員、牧島委員、三浦委員、吉田委員
欠席委員氏名	井坪委員、小澤委員、羽生委員、今村委員、山崎委員 アドバイザー 南信教育事務所 熊谷指導主事、内田指導主事
傍聴者	なし
出席事務局職員氏名	熊谷教育長、秦野教育次長、今井学校教育専門幹、伊藤生涯学習・スポーツ課長、社会教育 本島係長、樋口主事、スポーツ振興 氏原係長、松原主事、北村主事、賜部活動地域移行支援コーディネーター
会議の概要	以下のとおり

(伊藤課長)

- ・開会の挨拶
- ・欠席者の確認

(熊谷教育長)

- ・だいぶ秋が深まったかなと思ったら急に冬になったような感じになっております。文化活動、スポーツ活動は、大変盛んに行われていて、それぞれお忙しい日々を送られているのではないかと思います。そういう中で5月24日に第1回連携協議会を行いましたけれども、あれから10月にかけてそれぞれの部会で3回ずつご協議を深めていただきました。本当にありがとうございました。協議の内容は、非常に難しいテーマがいっぱいあり、課題解決には難しい部分も多々あったかと思っております。しかし、それぞれの皆様方が知恵を出していただいて、少しずつ方向性を出していただいておりますことに本当に心より感謝を申し上げます。ありがとうございます。
- ・長年、日本で続いてきた部活動の形を変えるということは、本当に至難の技で、ようやく県の協議会でも、ガイドラインが2月頃に出てくるのではというようなことも聞いております。そのくらい、簡単に事が進まない難しさもあるということを変更して感じているところです。
- ・また一方で、社会構造と言いますか、働き方と言いますか、産業界の協力も得なければならぬ難しいテーマではないかと思っております。つまり、指導者という部分では、学校という軸から地域の軸へと変わった場合に、働きながら指導もしていただけるような、社会的な構造も作っていかねばならない難しい問題でもあるかなというところも感じております。
- ・しかし、それを待っていては、子供たちにとっていい環境ができませんし、今までよりも良いスポーツ・文化環境というテーマで考えていますので、今までと同じことをまた地域で行うという考え方ではなくて、新しい環境を作っていくというスタンスで考えていかなければいけ

ないとも思っているところです。

- ・今日は、筑波大学の稲垣先生にもご出席をいただいております。大所高所からご指導いただけたらと思っております。
- ・運営主体の問題、保護者の皆さんの負担、指導者の問題等、そういったものを各方面の代表の方や実際に活動されている方、子供たちや先生方からしっかりと声を聞きながら進めていくことが、一番の肝要なことと思っております。今日も活発にご意見をいただきながら前へ進んでいきたいと思っております。どうぞよろしくお願い致します。

(氏原係長) 別紙資料により説明

- ・協議してきた内容の整理、これまでの取組の進捗状況
- ・各競技団体代表者との協議、学習会の実施、指導者の意向アンケートの実施
- ・文化芸術関係団体への聞き取り、社会教育団体への受け入れについての意向調査
- ・学校保護者地域指導者への意識醸成、説明会や学習会の実施

(牧原座長)

- ・8月1日に行われました第2回スポーツ部会では、大澤校長先生にご苦労いただき、市内全中学生の実態調査の結果を報告していただいた。その中で、私が特に大切にしていきたいと思ったことは、子供たちが、地域の指導者や他の学校の先生に指導してもらうことについてどう思っているかという項目である。良いと思う子供たちが、飯田市の子供たちの74.3パーセントいた。中身として、上達できる可能性が高まるということや異なる人々と交流ができる、経験者の指導が得られる等々、大変前向きな回答をしてくれていた。大人のための部活動の地域移行ではなく、子供たちにとっての地域移行になるために、こういった子供の声を私どもは大切にしながら、ぜひとも応えていけるようなものにしていきたいと感じている。

(塩澤副座長)

- ・文化部会では、第2回の時に竜峡中学校美術部の活動を紹介していただいた。その時に、中学生にやりたいことを実現させてあげよう、この方向は間違っていない、そういう確認ができたと思う。文化・芸術については、これから動き出すところが大きい。何をどうやるかという不安もありつつ、色々な意見を出しながら方向を定めていける良さがあった。吹奏楽部と合唱部もこうした姿を参考にしながら進めていけたらいい。一緒に活動してくれそうな地域で活動している団体への働きかけが大事になってくる。公民館とか、手塚先生の美博の活動とか、最近話題になっている創造館で活動されている方々に対して働きかけていく。陶芸だとかデザインだとか、今まで分野として上がってこなかったところも、一緒にやっていたいいよという意向があるというお話もいただいている。すごく力強く感じている。

(牧原座長)

まず各部会の検討を踏まえて今後の取組案について事務局から提案してください。

(賜 部活動地域移行支援コーディネーター) 別紙資料による説明

- ・推進計画を作成することを今年度のゴールにするとお伝えしたが、県からのガイドラインが2月に出る等今後変更もあり得る。そこで、しっかりと推進計画書ではなく、まずは取組の方向性、ロードマップというような形をつくっていくことにした。今日は、その骨格をお伝えしてご意見をお伺いしたい。
- ・学校部活動の地域クラブ活動への移行に向けた取組の背景
- ・飯田市の考え方と取組の目的
- ・方向性「令和8年度末までに休日の学校部活動を地域クラブ活動へ完全移行」
- ・地域クラブへの移行イメージと将来像、移行スケジュール
- ・具体的な取組（連携協議会の開催、組織・体制づくり、情報発信等）

(牧原座長)

- ・提示していただいたロードマップについて、何かご質問やご意見はありますか。拠点校方式をとりながら、学校の部活動の規模がだんだん小さくなり、地域のネットワークが大きくなっていくというイメージです。
- ・学校部活動の地域クラブ活動への移行に向けた取り組み案についてご意見をいただきたい。まず1つ目、基本理念、進めていく上での考え方ということで、飯田市の考え方と取組の目的、それから3の方向性につきまして、何かご意見、ご質問がありましたらお聞かせいただきたい。一番大きな部分は、今までの学校部活動を地域の人が同じようにやるという考え方ではないということが根底にある。そうした意味でウェルビーイングという言葉を使っている。理念についてはだいぶ練ってきているが、いかがか。

(委員)

- ・考え方は、みんなが共通理解していくことが一番大事なことだと思う。私たちが、全市型で取り組んできた中で、保護者にこの考え方を理解していただくことが一番大切で大変な作業だと実感している。保護者も学校も、いろんな話を受けて、少しずつ理解はしてくれている。やはりこの理念を持って子供たちを育成していくこと、要するに環境作りをしていくことが一番大事だと思っている。

(牧原座長)

ありがとうございます。関わっていかがか。

(委員)

- ・美術というのは、そんなに大会だとかコンクールがない。ところが、スポーツは、大会があって、勝敗がある。吹奏楽も同じようなものがある。ウェルビーイングは、楽しい、熱中する、仲良く、充実感、すごく厳しくやって大会で優勝して充実感がある、仲間との連携がすごく深まったという意味だと思う。もっと気軽にみんなで楽しもうとも取れる。熱心にやって成果を得られた時の充実感というふうにも取れる。その辺のところは どういう考えなのかははっきりさせた方がいいと思う。

(牧原座長)

- ・根本的なところになる。それについていかがか。子供たちにとっての楽しさっていうもののレベルに個人差があるということですね。

(委員)

- ・一律にまとめられない。厳しさと勝ちたいというものが楽しさであるというふうに捉える子供もいれば、それは苦手であるという子供もいる。例えば音楽もそうである。個人的なレベルに差がある。優れた子供は活躍して指導者も可愛がる。なかなかそれについていけない子供はだんだん嫌になって、ついていけなくなってしまふ。学校からも離れていく。学校は、そのあたりを配慮しながら、この子はこうだけど一方で優しいところがあるとか、カバーできる。ところが、外部の社会でそれができるか。可能性としてはそうはならないと思う。どうでしょうか。

(委員)

- ・おっしゃる通り。強化・育成と普及、2つある。全市型は、ウェルビーイングを大切に楽しくやろうというスクール。勝利を目指すスクールではないということを協力団体にはお願いしている。そうでないと、やれる子供とやれない子供に格差が出てしまう。教育的意義もなくなってしまう。クラブに移行すると勝利至上主義に走っていくクラブも多分ある。だから、そういうスクールではないと言っていく。それは別のクラブで費用を払ってやりなさいと持っていくしかない。こうしたことを全市型やっていて感じる。全市型はみんなで楽しくフレンドリーに頑張りましょうという理念でやっているつもり。そうでないとスポーツ人口も少なくなってしまう。まずそういう掘り起こしをする為のスクールであり、そういう形で進めている。強化に走ってしまうと今先生がおっしゃられたような形になる。避けないといけない。

(牧原座長)

その辺については、スポーツの関係ではこれまでもご意見が出てきていたところ。この辺について事務局の方ではいいですか。

(賜コーディネーター)

- ・これまでの協議の中でこの点については、かなり意見交換されてきている。クラブになれば、

指導者が勝ちたいためにどんどんやるという心配もある。ウェルビーイングは、本当に個別のだと思う。それぞれの生徒の取り組み方や楽しみ方が尊重されながら好きなスポーツ、文化芸術に触れるような形をどんなふうにできるかということを考えていく必要がある。それを実現する基本的な部分として、指導者研修が大事である。飯田市の取組について、地域の指導者と共通理解を図れるような場や研修の機会を設定していきたいと思っている。子供や保護者に不安を与えないためにも、安全安心を守られるネットワークも考えている。今後組織や運営主体をどうするか考えていきたい。

(牧原座長)

- ・飯田市は、拠点校方式からステップを踏んでいく方向である。いくつかのところが一緒になり、レベルに合ったチーム作りも可能になってくる。今まで1つの学校で1つのチームだけという形から連合という形になる。いくつかの学校が集まってきて、チーム編成の仕方が、学校代表という形からそこに集まってきた子供たちの実態等に合った形で、チーム分けすることも可能になってくる。そういった点もこれからは柔軟な対応が可能になると感じている。

(委員)

- ・基本的な考え方の最初のところに「部活動の意義を引継ぎ・・・」と書いてある。ここが引っかかる部分かもしれない。今までのようにもっと頑張ることができると思う人は、この部活動の意義というところを引っ張って強調して考えると思うので、この部分を今までの部活動とは違うとした方がよい。部活動の意義というものをもっと具体的に、さらっとした言葉で言った方が、競争心を煽らないような気がする。
- ・保護者の方によく理解してもらうのには、どうしたらいいか。主婦の立場としてみると、ぼんやりしたものも提示されるとわかりにくい。例えば、具体的に子供たちが減っているという数字がほしい。この学校が、現在この人数である。私が科学実験やっている小学校5年生、16人。こういう具体的な数字を聞くと、「えっ」と思う。この状態で学校の部活をやっているかということ、具体的な数字とともに、このことが必要だということを示してほしい。学校ごとの具体的な数字をピンポイントで出してほしい。驚いたことに、合唱部は、飯田市で2校しかなくて、緑中と旭中である。合同でも少ない。現実を母親、家族、父兄に知らせるべきだ。切実さがわかると思うので提案したい。

(委員)

- ・部活動の意義というのは、本来教員や子供たちが主体的に取組むことを引き継ぐことである。ただ、一般の方から見ると、部活動で勝利を目指してやってきた経験値が高いので、おそらく誤解を招く。本来の部活動の意義である子供の主体性という言葉を書いた方が分かりやすい。
- ・緑中合唱部は2名になってしまって、相談を受け一緒にやりましようとなった。地域指導者の方も、生徒のやりたいことをなんとか実現させたいという気持ちでやってくれている。教員に

は、少ないからその部活をやめればいいという考え方の人が一定数いる。子供たちがやりたいものをなんとか実現していくために、エリアを作ることでみんながウェルビーイングに向かっていくということを、改めて保護者や職員にも伝えていく必要はある。

(牧原座長)

- ・大切なお話をいただいた。各学校の実態に合ったものを説明していきなさいということですね。事務局では飯田市全体の傾向について各学校へはお伝えしている。こういう改革が必要だとアナウンスしている。さらに各学校単位で具体的におろしていくことが重要ですね。
- ・ロードマップに関わる場所、地域クラブ活動の移行イメージと将来像、それから移行スケジュール。こちらについて、何かご質問、ご意見等はあるか。

(委員)

- ・今は、中学生に限定された議論ですが、小学校にも金管バンドがいっぱいある。ミニバスケット、バレー、野球もある。小学生から中学生への移行について、団体を移るという感覚になるのか、連携しながらうまく引き継ぎができるのか、新たな人と出会う場をどう設けるのか、小中の引き渡しのイメージがつかない。12月に小学生の金管演奏会があり、中学生も行く。小中連携ということが気になることである。
- ・各学校には、コミュニティスクールがあり、地域と一緒に活動している。吹奏楽部や合唱部は、地域に出ていく学校の看板である。今月も5回、地域に呼ばれて出ていく。地域と関わる窓口となる。例えばこれを拠点校でやるとなると、全地区に呼んでもらって回るとかその辺のイメージが持ちにくい。コミュニティスクールとどう連携していくのか教えてほしい。
- ・私は、コンクールも好きだが、コンクールよりも地域の方に聞いてもらい、地域に出て拍手をもらう方がよほど楽しいと思っている。地域に出ていくという場が、夏祭り、文化祭、冬の祭りといろいろある。計画的に出ていきたい。うちの地区の学校の子が来てくれることは、顔が見え、地域にとって結構大きいことだと思う。拠点校でも、地域の子だっていう認識が生まれる。

(牧原座長)

地域のオラホの学校の子供だという実感が持てる参加もあり得るということですね。

(委員)

文化部としてはそんな感じがする。

(牧原座長)

- ・拠点校でまとまっの活動場面と各校で活動するというように柔軟性を持たせてあげたいということか。これは考え次第である。どうですかというよりも、みんなでこうやって検討して

変えていけることだから、こうあってほしいと言っていただければ、みんなで検討できる。3校が一緒になった子供たちが、その地区のところへ行っても悪くはないと思う。今までの活動と違って拠点校でやっていることを地域の方に知っていただく機会にもなる。オラホの地区の子だっという実感を持ちたいこともよくわかる。工夫できると思う。

(委員)

- ・美術は、具体的に考えていくと難しいと思う。全市型の文化講座をどうしようと考えた時に、割と人材があり、みんな前のめりで、協力したいと言ってくれている。主には創造館を使って活動されている方からも、飯田下伊那でアートに関わっている制作者の方たちからも、良いことなので是非協力したいと言ってくださっている。具体的に樋口さんと相談しながら日程も決めて、具体的なプランもできてきている。中学生がどれだけ集まるかを1番心配している。
- ・美博で中学生の実技講座をやっている。美術は、やってもやらなくてもどちらでもいいというような気持ちがある。美術部というとマンガイラスト部＝美術部。大概そういう中学校が多い。圧倒的にマンガイラストの情報に溢れ、当然のようにマンガイラストの方に流れている。美術には多様性がある。染色、焼き物、絵1つ取っても色んな描き方があることを、知らないところがある。だから、こういうこともできる、こういうことをやってみないかという場を作ると、多分入ってくると思う。生徒たちの、あるいは保護者の美術に対する意識が、学校外でもできるとなれば良い。諸外国では当たり前である。中等教育で美術はない。ヨーロッパ、アメリカでは地域でやっている。日本でも10数年前中等教育から美術をなくそうというようなことで危機感が流れた時があった。多分今も文部科学省では、そういう考え方を結構持っており、それをいつ出すかとなっているのではないか。だからこの地域移行は本当に差し迫っている大事な問題である。
- ・もう1つは、今は、学校の部活動としてマンガイラストを描いている。ぜひ前段階の体験として外部指導者を入れていただきたい。陶芸ができる方や、そういうようなことを要請していただきたい。美術の先生だって、全ての分野を知っているわけではない。染色のことなど何も知らない。だから、いろんな方に声をかけて、学校の水道場だけあればできるというような範囲でね。部活動に参加してもらうような要請をしていただくと、だんだん繋がっていく。

(牧原座長)

- ・研修を兼ねたような、そういう取組をということですね。

(委員)

- ・先ほど、小中の関係について、下久堅の例を言うと、ジュニアクラブとして男女ミニバスがある。スポーツ離れで下久堅の子が、1名、2名ぐらい。竜丘、松尾、他の地区からもきている。そういう環境は小学校時代にできつつある。
- ・少年野球で言うと丘の上ファイブスターズがある。1つの地区だけではなくまとまってやって

いるという土壤もある。この拠点校は、地域のクラブとして小学校の方からだんだん中学、高校生になっても、大人になっても、競技力目指したい人はこちらのクラブ、楽しくやりたい人はこちらのクラブという感じになるのではないかと思う。

(牧原座長)

- ・都会と違う飯田下伊那の状況で、子供たちにとって大切な部分である。小規模校が多い。その中でこれをやりたいという子供の欲求をどうやって保証してあげるかっていうことですね。これこそ飯田市が取り組むべき大きな柱である。重要な部分である。
- ・最後に具体的な取組について何かご質問、ご意見ございましたらお願いしたい。

(委員)

- ・先日、地域の吹奏楽の人が集まる会で指導者をやっていただく気持ちはありますか、と聞いた。皆乗り気でなんです。ただ平日休日もお願いできるとは限らない。自分たちの活動もある。6人、7人ぐらいでチームを組んだらどうかという話題もでた。その時に、やはり企業が、講師代を出していただけるとありがたい。各チームに指導者は何人必要かをはっきりさせていく必要がある。拠点校3校では、6人で見ますと言ったら、6人で毎日見るかもしれないし、今日は2人だとか、年間を通してどうなるのか話題になっていた。費用面がどうなるのかも不安である。

(牧原座長)

- ・この辺の金銭的側面については何かあるか。

(委員)

- ・地域移行を常に指導者がつかなければいけないという概念でいくと、今のお金の問題と技能向上をさせなければいけないことが、常にセットで動いてしまう。部活動の意義である子供が主体的に取り組むことを基本にすれば、最低限怪我や何かあった時の対応で十分である。必ずその専門的な指導者がマンツーマンでついていなければいけないというのは、切り離していかないと、おそらく地域移行は成立していかないだろうと言われている。もちろん指導していただくことに越したことはないが、それありきでは進めていくのは難しい。そこらへんも含めて、検討されていくことがいいと思う。

(委員)

- ・飯田下伊那は、文化系やいろんな行事がとても多いところだと思う。美博の方で伊那のあたりにチラシを配ると殺到する。上伊那はそれほど文化系の行事がない。飯田下伊那はすごくある。そういうものがたくさんある中で、文化系のクラブをあえてたくさん作ろうと思わないでくださいと言いたい。すでに目いっぱいの子供たち。頑張って力を入れてやろうと思わなくて

も、いっぱい転がっている。そういうものをうまく情報提供して、それを活用できるようにしていただければいい。かなりの文化系の活動がある。お願いしたい。

(牧原座長)

- ・新しく作るという発想ではなく、あるものを活用しましょうということですね。

(委員)

- ・私は、障がいのある方に関わっている。学校の枠の中では教えてくれるという状況があるが、地域に出ると障がいのある方は受け入れられませんというお話を、今でもたくさん聞く。障がいの有無に関わらず活動できる場を作りましょうっていう視点もちろん大事だが、障がいのない普通の中学生たちと一緒に部活に入れる方法を模索してほしいと思っている。例えば研修制度の中に、障がいのある方へ関わり方、障がいの理解という研修を入れていただけると今まで部活動に入れていた子が、地域でも入れる状況になっていくと思う。
- ・28年に全国障がい者スポーツ大会が国民スポーツ大会と合わせて長野県に来る。選手の発掘、育成っていうのも今これから求められる。逆行してほしい。

(牧原座長)

- ・大切なご意見。インクルーシブな活動環境づくりは、具体的な取組にあげていただいている。現場の声をお聞きしたので一段と大切にしていきたい。

(委員)

- ・飯田市では20地区の公民館長がある。その中で中学生ボランティアが私たちの地域に結構来ていただけると最近よくお聞きする。下久堅では、全部で90名位参加された。その中でも27名位の中学生が運動会のボランティアで活動した。緑中は3地区どこでも手をあげれば、それぞれの地域の活動に行けることをお話していただいて、下久堅の行事にも松尾の子が来ている。中学生も地域に出てきてくれるような土壌になっていると実感している。社会教育団体の活動でなくても、地域のいろいろな活動に中学生が、土日だけではなく平日にも参加してくれるような雰囲気を作っていけば、地域の人もありがたい。子供たちにとっても地域の人と触れ合い、学習の機会にもなる。
- ・現在、下久堅の方にも大会の前に練習をしたいからといって社会教育団体を登録して、グラウンドを借りている。部活動ではなく社会教育団体として保護者が作った団体である。そういう事実も承知しておいてほしい。20地区の館長さんは、その辺りも悩んでいる。

(牧原座長)

実態として対応しなければいけない部分である。以上で終わらせていただく。

(伊藤課長)

- ・最後に三石委員さんからいただいた意見について、飯田市は地域で実際活動されている皆さんの実態を把握しきれていない。これから次年度の社会教育関係団体の登録というような事務が動いていく。その中で、意向の確認をさせていただく。
- ・稲垣先生からアドバイスをお願いしたい。この取組の大事な部分のウェルビーイングの捉え方も両方あるというご意見もいただいた。強くなって勝つ、そこが目的になるとこれまでの部活動と同じ状況が起こって、居場所がなかなか見つけられない生徒さんが出る可能性もある。大事な視点である。小中での繋ぎについて、障がいのある方と一緒にやっていくことについて等の意見もいただいた。そのあたりもアドバイスいただければと思う。

(稲垣先生からのお話)

- ・本日のディスカッションを拝見し、コメントをまとめた。担当の方から、飯田市の現状等々をお聞かせいただいた。本当に全ての実態をわかっているわけではない。実態とそぐわないところもあるかもしれないがご了承いただきたい。
- ・まず、この改革を進めていく上で重要な視点として、今ある資源を最大限活用するというところに優先度を置いた方が良く思っている。つくば市では地域移行していく上でまずは少年団を最大活用して動いている。既にチームがあって、指導者もいて、小学生が活動している。それを中学生まで広げてはいけない理由は全くない。飯田市は、公民館活動が盛んであると伺っている。そういったところも含めて受け皿を作っていくという発想が重要である。新たに組織を立ち上げたり、仕組みを作るのは、お金もかかるし人材も必要となる。まずは今ある資源を最大限活用したり、体制を強化したりしていく。また、既にやっているものを見える化していくというような作業が、第1優先になる。そのためにも部活を縮小していきながら、移行していくということが必要である。
- ・2点目としまして、拠点校にしてから地域にという流れだが、全国の事例とか見ているとこの方式は多い。ただ掛川市は、拠点校にはせずにそのまま完全地域移行している。それは、拠点校にすることで、今まで自分の都合で活動できていた顧問が、連絡等の業務が増え、負担増となるということである。そういった拠点校方式ではなくて、一気に市全体でクラブを立ち上げて移行していくという流れもある。理想を言えば、拠点にするところはクラブ活動になるのが理想かと思う。全てはできないにしろ、そういう視点は持つておく必要がある。
- ・部活動指導員の導入について、もちろん地域人材の活用を促進していくという意味では非常に重要だが、これもやはり注意が必要である。部活動指導員は、結構導入されているが、結局顧問の先生が土日に出てきて部活の枠組みでやっている。言い方は悪いが、延命しているに過ぎない。指導だけしたいという方を集めても、結局地域クラブの運営主体者にはなってはくれない。部活動指導員を採用する際に、その方が単なる指導だけではなく、今後そういった地域クラブの運営者になってくれるのか、主体者になってくれるのかということも含めて採用していけると、地域展開というものに繋がっていくのではないかと。

- ・3点目としましては、統括団体と運営団体というものは、少し位置付けが違うと思っている。統括団体と言うと、スポーツ協会さんとか競技団体さんになるかと思うが、そのスポーツ協会が、飯田市全ての現場で指導者を派遣し、何か危機対応をしていくということは、おそらくできない。スポーツ協会さんは、ある意味統括団体で、各現場での活動を運営してくれる運営団体は他にあると思っている。質問だが、その辺りの運営主体のシステムっていうものをどのようにお考になっているのかお聞きしたい。

(賜コーディネーター)

- ・その辺りのところは、非常に迷っている。統括団体としては、スポーツ協会だと考え、指導者を派遣するような役割を担っていくことになるかと想定している。その指導者を学校とつなぐ役割の運営主体を誰にするかということところが困っている。総合型地域スポーツクラブだとか各競技団体だとか、あるいは今やっているクラブの方々をお願いしていくことになるのではないかと想定しているが、定まっていない。いい事例があったら教えていただきたい。

(稲垣先生)

- ・それがないとおそらくこの地域移行はできない。そこを見つける、立ち上げてもらう、そういうことを優先度高くやっていく必要がある。つくば市だと、まずは少年団の方に受け入れてもらう。足りないところは、新しいクラブを立ち上げてもらうように支援するというところでやっている。おそらくそれをせずに拠点校型で部活動指導員を導入すると、結局学校に残ったままで、地域に移行できないということになってくると思う。統括団体ではなくて、運営団体をどうやって作っていくのか。または、今あるところに協力してもらうのか、この地域展開のキーになるのかと思っている
- ・すでに飯田市の中でも全市型をやられている上に、各地区のクラブを拠点校でやっていきましようとか、先ほどのネットワークでも民間クラブや塾もという話もあったが、全市型スクール、民間の塾等が、どのような生徒に入ってもらうことを想定しているのかということも明確にした方がよい。子供が減っていく中で、クラブができてでも取り合いをしてしまっただけは全く意味がない。ウェルビーイングとは、その子自身のニーズと実際の活動のマッチだと思う。ある程度、「この活動は週に1回楽しむためにやります。」とか、「この活動は週3、4回ぐらい、競技力を高めるためにやります、それについては代金もいただきます。」というように、それぞれの活動が分けられるように明確に示していく必要がある。
- ・ネットワークに入るところも、非常に構想としては素晴らしいと感じているが、特に民間側からすれば、そのネットワークに入ることのインセンティブ、メリット、またはどうデメリットを回避できるのか。例えばこのネットワークに入ることによって学校施設を割安で使えるとか、そういうところまで設計していかないと、なかなか実現は難しいのと感じた。
- ・最後になりますが、今の部活動体制とは、180度発想を変えたものにもなると思う。拠点校型は、これまで通り1年間同じ種目をやっていくということ想定した上での発想だと思う。

そうなってくると移動が大変という課題も出てくる。例えば30人生徒がいたら、シーズン制にしてしまっただけで、この時期はみんなでサッカーやりましょう、この時期はみんなで野球やりましょうとしても良い。または、今まで週5回やっていたものを週2回にして、別の時間、他の曜日は、別の活動をやってみようという発想で、1つの学校で人数を確保しながら1人1人がいろんな活動ができる。こうした発想も持っていく必要がある。本当に規模の小さい自治体さんだと、おそらくそういうような議論をしていくしかない。そういった発想もあっていいと感じた。

- ・今日のお話を聞きまして、やはり期限をしっかりと示されたことは、本当に素晴らしい。様々な関係団体と協議しながら、意見を吸い上げながら行っているのは、他の自治体を見てもあんまりここまでやられているところはない。素晴らしい進め方をされている。

(伊藤課長)

- ・今、稲垣先生からアドバイスをいただいた内容について、何か聞きたい点等あればお出しただけだと思います。先ほどのウェルビーイングということとそれぞれのクラブでどういう子供を想定するかっていうことでいただいた。中学生のニーズを捉えた時に、うまくなりたいというニーズを全く排除するものではないところと、ウェルビーイングは、個人個人の捉え方が違うと考えたと、例えば楽しみたい時にはこういうクラブがあるよ、うまくなりたい時にはこういうクラブがあるよ、そこを明確にしていくことが1つの方向性であるということ。事務局としては、少し先を見通すことができた感じがした。稲垣先生、どうもありがとうございます。引き続き、全国の事例等、ご紹介いただければありがたい。
- ・次回の日程については、年が明けた2月6日ということで予定をさせていただいている。